

雑学 鳥獣植物戯詩

全24回

八木幹夫

第1回 【「鳥獣戯画」から

雑学「鳥獣植物戯詩」へ】

アニメブームと言われるが鳥獣の姿を擬人化し、社会の滑稽、風刺を描いた平安後期の「鳥獣戯画」は現代から見ても庶民感覚に満ちている。ヨーロッパにもフランソワ・ラブレールのような人文学者がガルガンチュア・パンタグリユエル物語で当時の権力を辛辣に戯画化した物語がある。権力の無謀や無能ぶりに呆れると、思わず正面から批判するよりはもつと深く世界を抉る方法をひとは探る。日本漫画の元祖のような絵巻物はおよそ44mにも及ぶ4巻の絵巻物。京都市右京区の高たか山寺やまでらに伝わる。作者は一人に限定できない。この匿名性、複数性が戯画を自由にし、庶民の声を聞かせてくれる。兎と相撲を取る蛙。それを囓す蛙たち。お公家さんの格好をする猿。狐、猫、鼠、雉、木菟、貂、鹿、猪などが軽快な筆致で描かれる。連載にあたり、鳥獣に限らず昆虫、植物の姿も捉えてみたい。とかく詩の世界は生真面目さに幽閉されやすい。部屋に籠るよりは日の光を浴び、捕虫網を持ち、麦わら帽子で野山を駆け巡るのが好きだった筆者には鳥獣昆虫植物は格好の題材。人間以外から学ぶことは無尽蔵だ。